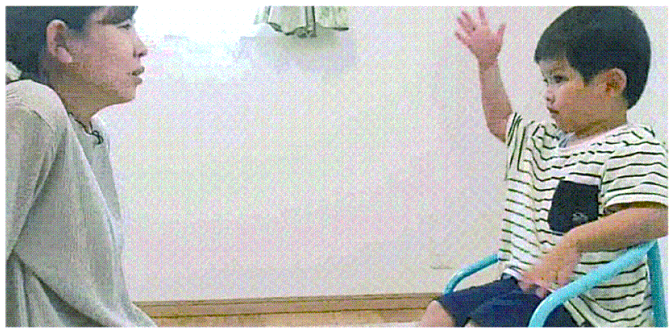
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

柏崎発
医療最前線
国立新潟病院の研究
(下)

発達障害の子 成長助け

育児ストレス 講座で軽減

応用行動分析　小児科医 藤中 秀彦さん(58)



(上)ABAに関する親向けの講座で講師を務める藤中秀彦さん(右奥)＝柏崎市赤坂町(下)新潟病院のスタッフによるABA療育の様子＝2022年（同病院提供）

発達が気になる子どもについ強く叱ってしまい、後で後悔する―。そんな育児のストレスを軽減するための講座が柏崎市の国立病院機構新潟病院で行われている。

この講座には、海外で発達障害の子どもの療育に広く活用されている「ABA（応用行動分析）」の手法が取り入れられている。講師を務めるのは、県内初とされる「小児ABAリハ外来」を同病院で開設した小児科医の藤中秀彦さん(58)だ。

6月中旬の講座はABAリハ外来に通う子どもの親だけでなく、子どもの発達に悩む保護者も参加した。藤中さんは、参加者を子ども役と親役に分け、子どもが良いことをしたときに褒め、周囲で「今の褒め方が上手だったね」などと評価し合うロールプレイングを行った。

ABAの手法を参加者に身をもって体験してもらい、子どもの行動を褒めたり、分析したりすることの大切さを呼びかけた。

◇　◇

参加した柏崎市内の母親(38)は「子どもとの関わり方を見つめ直すきっかけになり、他の人の話も聞けてよかった」と語った。

小児ABAリハ外来で実施している「ABA療育」とは、子どもの行動を分析し、ほめるなどの対応をして、あいさつといった望ましい行動を増やし、大声で叫ぶなどといった望ましくない行動を減らすことを目指す。

海外では、ABA療育によって子どもが獲得する言語数や発達指数が伸びることが証明されている。欧米でも有資格者によるABA療育の個別指導が公費負担で可能となっており、療育法の一つとして活用されているという。

ただ、ABA療育の認知度は日本では低い。藤中さんは「障害のある子どもに親はつい厳しく叱ってしまうことがある。子どもの特性を理解すれば、子どもの心を健全に伸ばすことができる」と強調する。

昨年12月に始まったこの外来には、ひと月に約15人が通っている。ただ、療育の中心は家庭となるため、親のプレッシャーやストレスが懸念材料として浮かび上がった。

6月から同病院で行っている講座は、親のストレスの軽減策を探る研究でもある。

◇　◇

講座は「発達が気になるお子さんのための幼児版ペアレント・サポート・講座」とし、親のストレスを軽減することを第1の目的としている。

テキストや講義に沿って育児を学ぶだけでなく、参加する親が抱える悩みなどについて話す時間を多く設けるのが特徴だ。1時間半の講座の中で、約7割は親同士の会話の時間だ。

講座の前後に親に質問用紙を配って調査を行い、ストレス度を点数化して測る。話すことと育児ストレスの関係性について解明し、その研究成果を２０２４年末にまとめたい考えだ。

親のストレスを軽減できる有効な手段が見つかれば、それを組み合わせることでABA療育にもプラスの効果が期待できる。藤中さんは「子どもの心を健全に保ちながら、発達指数などを伸ばすABA療育の効果を日本でも示したい」と話している。

ABA療育　ABAとはApplied（応用）、Behavior（行動）、Analysis（分析）の頭文字を取り、「応用行動分析」と訳される。子どもにとって役立つ行動を増やし、問題行動を減らすことを目指す療法だ。自閉スペクトラム症など発達障害のある子どもの療育に有効とされる。保護者にもメリットがあるとされ、子どもの行動を理解できるようになり、心の負担が減るといった効果も期待できる。